
なんでも屋比留間

伊之口浩作

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

なんでも屋比留間

【Nコード】

N3390A

【作者名】

伊之口浩作

【あらすじ】

雑居ビルの二階。廊下を一番奥の一室。そのドアには、安っぽい看板が掲げられている。その名も「なんでも屋比留間」そんな「なんでも屋比留間」に、一本の依頼の電話が舞い込んだ。

プロローグ（前書き）

えー、作者の伊之口です。今回、初めての推理物に挑戦しました。何かと至らない点が多いかと思いますが、どうかよろしくお願いますm()m

プロローグ

とある雑居ビルの二階。廊下の一番奥の一室。そこから、若い男の落胆の音が響く。

「チクシヨオー！ 俺の五万がアアア！！」

事務机の上に置かれたラジオからは、歓声と共に実況キャスターの声流れる。

『繰り返します。本日のレースは一着ゴッドウィンド・ジャパン。

二着ゼロ・ウオーの五・九。配当は、一枚八四〇〇円です』

ラジオ越しに競馬場の熱気と歓声が轟く。しかし、叫び声の主は机に突っ伏し弱々しくぼやく。

「チクシヨオー……。ホワイト・ワイルドとブラック・バツクは何やってんだよ……」

男の手には、彼が先程列挙した馬の名が明記された馬券が握られており、男はそれを拳の中でくしゃくしゃにしていた。

そのおり、悲しみのどん底に涙する男に、彼よりももっと若い青年が近づいて来た。

「だから言っただじやないですか。ホワイト・ワイルドもブラック・バツクも絶不調だって」

青年は『それ見た事か』と言わんばかりに言ったが、それでも一角の敬意は欠かなかった。男に更に歩み寄り、男の両肩に手を置く。

「さ、社長。仕事しましょ。家賃、半年も滞納してるんですから、そろそろヤバイですよ」

涼しい笑みを浮かべ、軽快に皮肉る。それが災いしたのか、男は青年に食ってかかる。

「仕事だと！ てめえ、それは嫌みか！？ 仕事したくても依頼が無けりやなんも出来ねえだろ！？」

青年の胸ぐらを掴み、大負けの時に流した涙で顔をくしゃくしゃにししながら、男は怒鳴った。

しかし、青年は慌てる事なく、同じ事務机の上の電話を指差した。電話はかなり型遅れなタイプで、黒いダイヤル式だった。

男は負けのシヨックと皮肉られた事への怒りで、聴覚がすっ飛んでいたのだろう。けたたたましいベルに今更気づくと、一旦咳払いをして電話に応じた。

「はい。こちら、なんでも屋比留間。ご依頼ですか？」

男は電話の向こう側の人間と、しばし言葉を交わした。そして、受話器を取ってから二分に満たない頃、ついさっきまで沈んでいた男の顔が、日の出の様に明るくなった。

「ありがとうございます！ それでは、時間通りに伺います！！」

歡喜の声と共に受話器を置くと、振り返ってその場で跳ね回った。「やったぞ！ 1ヶ月ぶりの仕事だ！ それも相手は大金持ち！！」

その後も声にならない喜びを全身で表現した男は、上着をひつつかんで事務所を後にした。

「社長！ 待って下さい！」

青年もまた上着を掴むと、風の如く走り去る男の後を追った。

プロローグ（後書き）

「男」改め、比留間隆：ギャンブル好きの二八才独身。大学を中退した後、「会社を起こして有名になろう」という野望の下、「なんでも屋比留間」を興す。しかし、開業以来、舞い込んだ依頼はたったの八件。比留間は嫌になり、ギャンブルに没頭している。ちなみに、事務所は自宅兼オフィス。

第一話（前書き）

「青年」改め高橋裕一：なんでも屋比留間の唯一の社員。高校卒業後、「なんとなく、楽そう」という理由で就職。比留間に振り回されがちだが、以外にも忠実。ただ、なんでも屋の仕事だけでは食べていけないので、数多くのバイトをこなす。長身で痩せ型の二一才、独身。

第一話

なんでも屋の事務所から、自転車を飛ばす事三〇分。依頼主の豪邸は、住宅街から離れた林の中に経っていた。

比留間と高橋は豪邸の門の脇に自転車を停めると、互いに身なりを整えてから、呼び鈴を鳴らした。

『はい。どちら様でしょうか？』

呼び鈴を鳴らしてから間もなく、インターフォンから上品な女性の声が聞こえた。

女性の余り上品な声に驚きつつも、比留間はインターフォンに向かって応答した。

「ええと、なんでも屋比留間です」

「同じく、高橋」

『かしこまりました。どうぞ』

その直後、巨大な格子状の門が開いた。周囲に誰もいない所を見ると、屋敷の中から操作できるのであろう。

二人が門をくぐり終えると、再び門は閉まった。

門から続く一本道を歩くと、玄関の扉に行き着く。比留間がノックしようとしたとき、扉が開きその隙間から女性が顔を覗かせた。

「比留間様と高橋様ですか？」

二人はいきなり現れた女性に驚いたが、彼女の声が先程のインターフォンの声と同じであることに気付くと、軽く会釈をして屋敷の中に入った。

二人が屋敷の中に入り、玄関で靴を脱ぎ終えると、その家の家政婦と思しき女性が口を開いた。

「比留間様、高橋様。今日は遠い所をわざわざお越し下さいます、お疲れ様です」

高級旅館の様に彼女は対応した。

このとき、比留間は依頼の電話もこの人だ、と確信した。

「わたくしは、この家で住み込みで働いている恩田晶子と申します」
そう言つて、恩田はぺこりと頭を下げた。恩田は活動的なジーンズとパーカーの上にエプロンをまとい、髪は短めだった。どこか大人しそうな印象が漂い、年は二〇代前半と見えた。

「あ、なんでも屋比留間の社長の比留間隆です」
比留間はそう言つて、上着の内ポケットから名刺を取り出し、恩田に差し出した。

恩田は名刺を受け取ると、すぐさま、二人に今日の依頼の内容の詳細を説明し始めた。

「本日の夜から明日の朝まで、お二人には、旦那様の所蔵なさいます宝刀の警備をして頂きます」

「警備？」

電話では、かなり大まかに『明日の朝までの仕事』としか伝えられていなかったため、比留間は驚く外なかった。

「はい。では、こちらへどうぞ」

恩田はすたすたと歩き出し、玄関から数歩行った所にある扉の前で止まった。

そのときだった。

「あれえ、あんた達、誰？」

恩田の向こう側には、二〇代後半かそれ以上の男が立っていた。男はネクタイの無いスーツ姿で、右手には缶ビールを持っていた。

「直人様。こちらは『黄金の宝刀』の警備をなさる……」

「比留間です。なんでも屋比留間をどうぞよろしく」

「同じく、高橋」

恩田が言い終わる直前に、比留間は男に名刺を渡した。

ついさつき現れた直人と呼ばれた男は、この家の長男の村瀬直人と言う。二人を見たりアクションからも、直人は二人の事は知らされていない様であった。

「なんでも屋比留間……。ああ、オレ村瀬直人。よろしく」
直人も比留間に名刺を渡した。

「村瀬？」

比留間は『村瀬』という姓に疑問を抱きつつ、直人の名刺に目を通す。

その名刺には、『村瀬骨董株式会社 代表取締役・村瀬直人』と明記されていた。

そのとき、比留間の上から名刺を覗いていた高橋が口を開く。

「社長。村瀬骨董っていつたら、ホワイト・ワイルドの馬主の村瀬権蔵の会社ですよ」

「あれ、おやじを知ってたんだ」

直人氏はビールを飲みながら言った。

そのおり、

「黙れ！！ 貴様の部下のミスは、上司である貴様の責任だ！！」

恩田が手を掛けたドアの向かいのドアから、猛烈な怒鳴り声が響いた。直後、向かいのドアが乱暴に開け放たれ、中から涙目の男が飛び出して来た。

「父さん！ 頼む、見逃してくれ！！」

額を床に擦りつけんばかりに土下座をする。しかし、開け放たれたドアからでて来た白髪の老人は、土下座する男を蹴飛ばし、すぐさま部屋に戻り、ドアを力任せに閉めた。

「父さん！」

土下座した男は閉まったドアにすがりつくが、ドアは沈黙を保った。

「彼は？」

比留間は直人に訊いた。

「ああ、あれは俺の兄の正人」

そう言っつて、直人は床にうずくまって泣きじゃくる正人を指差した。

正人と呼ばれた男は、上下黒のスーツを着ており、体型は少しふくよかであった。

「正人。またおやじにどやされたのか？」

直人は正人のそばにしゃがむと、ビールを啜りながら言った。すると、正人は起き上がり、直人にしがみついて涙ながらに語った。「……聞いてくれよ。……父さんたら、僕の部下の犯したミス of 責任取れって言うんだよ。それも、ただのミスじゃなくて三〇億の損失だよ！ そんなの、僕一人じゃ無理だよお……」

そう言っつてうなだれる。そんな正人の肩を直人は優しく叩いた。「可哀想になあ。けどよ、あの頑固者にそう言われたなら、大人しく言うこと聞くしかないな。とりあえず、お前のサイパンにある別荘売って、三〇億の頭金にするんだな」

正人が起き上がった事により、正人の髪型や容姿などが分かった。正人は黒縁でレンズの大きなメガネを掛け、長めの髪を中央で分けていた。また、二重顎と無精髭が目立ち、仕事の出来るタイプでは無いという事が見て取れた。なんとなく、甘えた感じの口調も気になる。

直人は正人に助言し終わると、そそくさと踵を返し、自室へと戻った。

正人は力無く立ち上がると、とぼとぼと歩き出し、正人の隣の部屋に入った。

廊下に比留間、高橋、恩田だけになったところで、恩田はようやくドアを開けた。

部屋は二〇畳程の広さで、部屋というよりは広間と呼ぶ方が相応しい気がした。天井の中央にはシャンデリアが灯り、窓の類は一切無かった。そして何より、部屋の中央には、頑丈そうな脚で支えられたショーケースが鎮座していた。そのショーケースの前に、長机とパイプイスが置かれている。

「これが、本日から明日にかけてお二人に警備して頂きます宝刀。『黄金の宝刀』で御座います」

捻りの無い名前とは裏腹、『黄金の宝刀』はかなりの物であった。鞘は眩しい位にシャンデリアの光を反射し、大小様々な宝石類が散りばめられている。

「すげえ……」

「……」

一言だけ感想を漏らす比留間と、輝きに圧倒され絶句する高橋。そんな二人を尻目に、恩田は『黄金の宝刀』の説明を始めた。

「この『黄金の宝刀』は、鎌倉時代に造られ、刀としても骨董としても稀少価値が高く、時価三〇億とも、それ以上とも言われております」

大体の刀の説明を終えると、恩田は依頼の内容の確認を始めた。

「お二人には、只今のお時間から、明日の朝までこの宝刀の警備をして頂きます。その際、必要なお飲み物やお夜食などは準備させて頂きます。依頼料は、明日の朝になり、宝刀の無事を確認し次第お支払わせて頂きます。では、何か御座いましたら、お手元のベルをお使い下さい」

恩田はそう言うと、机の上のハンドベルを指差し、『黄金の宝刀』に食い入る二人の背中に深々と礼をして、広間を後にした。

「三〇億だってよ！ これだけありゃ、毎日パチンコ打って、一生過ごせる」

「もっとマシな例えして下さいよ。家賃払うとか、借金返すとか、そば屋のツケとか」

目の前の正真正銘のお室に目を輝かせる比留間に、高橋はぶつぶつと言った。

第二話

二人はしばらく宝刀を見詰め続けていた。その時、部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「ちゃんとやってる？」

扉を開けて現れたのは直人であった。彼は右手に雑誌を抱え持っている。

「いやね。ずっとそんな悪趣味な刀ばかり見てるのも退屈だと思つてさ、気を利かせて、ホラ、持ってきたわけ」

直人はそう言つて、雑誌を掲げる。

「ああ、ありがとうございます……」

振り返つた比留間は軽く頭を下げた。

「そうそう。二人の事聞かせてくれない？　なんか仕事がかどらなくてよ」

直人は雑誌を机に置くと、パイプ椅子に腰掛けた。座ると、直ぐさま煙草に火をつける。ちなみに、雑誌は高級外車について専門的に載せている物だった。

「私たちの事ですか？」

「そう。比留間さんと……」

直人は室内を徘徊していた高橋を見る。直人の視線に気付いた高橋は、自分を指差してきよとんとする。

「高橋さんのね」

直人は高橋を指差した。

高橋はうつつくのを止め、直人の隣に座つた。比留間は既に着席していたので、比留間と高橋とで直人を挟む格好となった。

「なんでも屋なんだってねえ。いつもはどんな仕事してんの」

「いつも、というか、仕事は色々です。ペット探とか、引っ越しの手伝いとか。でも、こんな立派なお屋敷に来たのは初めてですね」
比留間は気恥ずかしそうに言う。

「ふーん。でも不思議だな。いつもは警備会社の人があるのに……」
直人は煙草をふかして考え込む。
その時、比留間の腹が鳴った。

「すみません……。今日何も食べてないんで……」

比留間は顔を赤らめ、片手を後頭部にあてて申し訳なさそうに言った。

「そうなの。じゃあ、飯でも食べる？」

直人はそう言うなり、机の上のベルを躊躇することなく鳴らした。

「はい。何でしょうか？」

ベルが涼しげな音を奏でた直後、後ろの扉が開いて恩田が現れた。

「何か持ってきて。三人分。よろしく」

直人は指を三本立てて恩田に示す。

「かしこまりました」

恩田がそう言ってお辞儀してからはけると、廊下のきしむ音が聞こえた。

数分して恩田が帰ってくると、彼女はサンドイッチとコーヒーを持ってきた。

「お待たせ致しました」

「うん、ありがとう。そこ置いといて」

直人は机を指差す。

直人の指示に素直に従うと、恩田はその部屋を後にした。

比留間と直人は軽食を摂りながら談笑する。会話に乗り損ねた高橋は、直人の持ってきた外車の雑誌を熟読していた。

その際、酒の勢いも手伝って、直人はこの家の住人について色々話してくれた。

まず、この家の大黒柱であり、『黄金の宝刀』の所蔵者でもある、村瀬権蔵について。彼は『村瀬骨董株式会社』を一代で築き上げ、高齢となった今は、会社経営を全て直人に任せ、現在は形だけの会長である。金に対して非常に貪欲で、ありとあらゆる手段を用いて、日本中の骨董品をかき集めているという。その非情なやり方は、同

業者の間で悪評高い。

次に、長男の正人。彼は村瀬家の長男として生まれ、会社の次期社長とまで言われたが、実際は父の権力に甘えた世間知らずで、次期社長の椅子は直人の物になると言われている。また、会社の部下も正人の影響で墮落しており、会社ではミスを連発し、他の社員から目の敵にされている。

次に、直人自身。彼は次男でありながら実力があり、権蔵からの信頼は絶大である。最近では、高級外車に没頭しているらしく、フロリダの別荘に幾つか持っているらしい。実際に、比留間と高橋はその写真を見せてもらった。直人はそれ以上は語らず、次の話題に入った。

最後に、家政婦の恩田について語った。彼女は最近雇われ、それまでは二十年間働いていた家政婦がいたようである。その家政婦は、交通事故で亡くなったらしい。入ってきたばかりで要領が掴めず、しょっちゅう権蔵に叱られているらしい。直人がその話をしているときも、廊下から老人の怒鳴り声が聞こえてきた。

村瀬家の家庭事情を話し終えると、直人はすぐに部屋を出た。なんでも、あさつてまでに仕上げなくてはならない仕事があるらしい。直人が部屋を出た直後、比留間は高橋に話しかけた。

「なあ、なんか変じゃないか」

高橋は黙ったままだったが、比留間は続けた。

「さつき直人さんは『いつもは警備会社の人がある』って言ったけど、じゃあ、なんで今日は俺達なんだ？」

高橋は沈黙を保っていた。

「聞いている？」

不審に思った比留間は、高橋の俯き気味の顔を覗き込む。すると、彼は座って雑誌を開いたまま眠っていた。

「こいつめ。やる気あんのか？」

比留間は高橋を訝しげな表情で睥睨しつつ、卓上のハンドベルに手を伸ばした。

「はい、お呼びでしょうか？」

ベルの音の直後、恩田が扉を開けて現れた。

「聞きたいことがあるんですけど、良いですか？」

比留間は椅子ごと恩田の方を向き、少し改まった仕草で訊いた。

「はい、どうぞ」

恩田は快い返答をする。

「いつもはプロの方が来られる様ですが、なんで今日は俺達なんですか？」

「はい、それは、いつもの警備会社が都合が付かないらしく、やむを得ずお二人に来て頂きました」

恩田は言葉に詰まることなく、流暢にそう言った。

「そうですね。分かりました」

比留間は会釈して謝意を示す。

「では……」

「ああ、あとコーヒー下さい」

退室しようとした恩田を、比留間はカップを手に持ちつつそう言うって止めた。

恩田は比留間に歩み寄ってカップを受け取ると、深々と礼をしてから退室した。

「ふう……」

特に意味のないため息をつくとき、比留間は背もたれに思いきってのけぞり、その部屋を天上を仰いだ。輝かしいシャンデリアの灯が眩しく、ものの数秒しか見ていられなかった。比留間がまぶしさに耐えかねて姿勢を正すと、向かいの部屋のドアが開く音が聞こえた。
(彼が権蔵さんか?)

比留間は扉越しにいる者をそう推察したが、興味が湧かなかったのですぐに止めた。

丁度、その時、

「恩田!!! 貴様何回言えば分かるんだ!!!」

廊下から、老人の怒鳴り声が聞こえた。その声の大きさといえ、

うたた寝をしていた高橋が目を覚ます程だった。

「すみませ……………」

「黙れ！！ 素人なんぞに宝刀の警備をさせおって！！ 何かあったらクビにするぞ！！」

恩田が謝るより早く、権蔵は再び声を張り上げた。

「全く……………」

権蔵はそう言うと、向かいの自室へと戻った。

程なくして、広間の戸が開き、恩田が現れた。

「お待たせしました」

恩田は卓上にコーヒーを置く。

比留間は先程の事を気遣い、恩田に声を掛けた。

「なんか、大変ですね」

「いえ、新人にはよくあることです……………」

少し俯き加減に答えた後、顔に微笑みを浮かべて部屋を去った。

「……………」

押し黙ったままカップの中のコーヒーを見詰めてから、比留間は一口啜った。

第三話（前書き）

ここで一点お詫びがあります。

第一話で、「直人が村瀬家の長男」と表記したにも関わらず、第二話では「正人が村瀬家の長男であり、直人は次男」と表記してしまいました。

混乱されている読者の方もおられると思いますので、整理します。
【村瀬家の長男は、正人。次男は直人】
です。

紛らわしい表現をしまい、誠に申し訳御座いませんでした。

m () m <

第三話

二杯目のコーヒーを飲んでから何分かした頃、比留間にはわかな尿意を催した。静かに立ち上がってトイレへと向かう。その時、高橋は再び夢の中にいた。

しばらくして、比留間がトイレから戻ると、廊下の最果てにある物置に恩田がいた。その時の恩田は、物置の中へ入ろうとしている所だった。

「恩田さん。何してるんですか？」

比留間は気さくに声を掛けた。

「はいっ。ええと、旦那様が『明日、大切なお客様が来るから、今日の内には掃除の掃除をしておけ』と申されたので、その通りに……」
恩田はいきなり声を掛けられたせいか、僅かに驚いた。しかし、すぐに冷静を取り戻すと、物置の中の業務用の掃除機を示してみせる。

「そうなんですか。あ、でも、もう夜も遅いですし、大きな音を立てて大丈夫です？」

「そうですね。では、旦那様に確認を取ります」

恩田はそう言うと、比留間とすれ違い権蔵のいる部屋の扉の前に立った。

「旦那様。これからお掃除を始めますがよろしいでしょうか？」

二回ノックした後、恩田は扉越しにそう訊いた。しかし、返事は無かった。

「旦那様？」

更にノックする。しかし、相変わらず返事はない。

その時、宝刀の隣の部屋から直人が現れた。

「恩田さん。何してんの？」

「直人様。それが、旦那様にお掃除を頼まれました……」

「へえ。あ、でも、今は部屋に入らない方が良いでしょう。今は経済ニユ

「入の時間だからさ。この時間に部屋に入ると、凄く機嫌が悪くなるんだよ」

「そうなんですか？」

「恩田さんは新人だから知らないんだよね。次からは気をつけな」

直人はそう言って、恩田の肩に手を乗せる。

「はい、でも一応お部屋に入って聞いてみます。後で何か言われるのは嫌なんで……」

恩田は恐る恐るドアを開け、中の様子を伺いながら小さな声で聞いた。

「旦那様、お掃除をしてもよろしいでしょうか？」

真つ暗でテレビの光だけがまばゆい室内に、ソファに座った権蔵がいた。テレビは直人の言った通り、その日の株価の変動と終値を報じていた。

「旦那様？」

二度の恩田の問いかけに、権蔵は反応しなかった。聞こえていなかったというのが適切であろうか、テレビ画面に食い入り返事をしようとしな。恩田を背にしていたので表情は分からなかったが、恐らく強張っていたであろう。

恩田が三回目を発しようとしたとき、恩田の背後にいた直人が彼女に話しかけた。

「な、言ったでしょ。掃除の事も忘れてるよ」

直人は再び、恩田の肩に手を乗せた。

恩田は観念したのか、静かにドアを閉めた。

「さて、俺も仕事に戻ろう……」

直人は踵を返して自室に戻ろうとしたが、その時彼の視界に比留間が映った。それをきっかけに何か思い出したのか、直人は比留間に話しかけた。

「そっぴやさ、警備の方はどう？」

直人はそう言って、広間のドアに手を掛けた。両開きのドアの片方を開き、全体の半分まで開けたところで広間に入る。比留間もそ

れに従った。

しかし、このとき既に事件は起きていた。それを裏付けるかのように、広間の中の直人は歩みを止め、目前の光景に釘付けになる。

「……宝刀が……、無い……」

広間の中央、ショーケースの中にあつた筈の宝刀が、事もあろうに消えていた。ショーケースは壊れておらず、きれいさっぱり消え失せていたのである。

「……」

直人に続いて広間に入った比留間も、その光景に圧倒された。

二人ともそこから動こうとせず、その場に凍り付く。

ややあつて、二人の後方にいた恩田が、微動だにしない二人を不審に思ったのか、広間の中を覗き込んだ。

「どうかされましたか……。えっ！ 宝刀が……」

恩田は目を見開き、開いた口が塞がらない。塞ごうと唇を動かすが、閉じる寸前で再び開き、傍目からは口をぱくぱくさせてる様に見えた。

宝刀に対し、他の二人に比べて思い入れの少ない比留間は、誰よりも早く我に返った。そして、我に返るなり部屋の中の部下の事を思い出した。

「高橋……。高橋は何やってんだ……」

静かに視線を下げると、机に突っ伏している高橋の姿が目映った。

比留間は高橋に早足で歩み寄ると、高橋を強引に椅子から引き剥がし胸倉を掴む。

「高橋！ てめえ何やってんだ!？」

鬼気迫る形相と咆哮。それに反応した高橋は、直ぐさま目を覚ます。

「社長……。どうしたんですか……?」

意識を取り戻した高橋は、一度大きなあくびを放つと、比留間の腕からするりと抜け、入り口で固まる恩田と直人を睥睨した。

「何か……、あつたんすか……？」

高橋は寝ぼけまなこで言った。

「チクシヨウ！ 盗まれた……！」

比留間は激しく狼狽し、思いきり机を叩く。その衝撃でコーヒークップが一瞬間に浮き、再び机に落ち着くと、部屋中に『ガチャツ』という音が響いた。

それにより、後方の二人が我に返る。

「大変。早く旦那様に……！」

恩田は踵を返して権蔵の部屋へと向かう。

「旦那様。大変で御座います。宝刀が……、宝刀がありません」

ドアを強く叩き、驚愕に声紋を支配されながらも声を張り上げる。しかし、権蔵は姿を現さなかった。

「どいて。おやじ、アンタの大事な宝刀が無くなってぞ」

恩田とドアの間に割って入った直人は、恩田と同じようにドアを叩きながら言う。

直人の呼びかけにもかかわらず、権蔵は現れなかった。

「おやじ……！」

金に貪欲で宝刀に目のない権蔵が現れないことに苛立ちを覚えた直人は、半ばドアを蹴破る形で部屋に入った。

「聞いているのか……？」

座ってテレビ画面に食い入る権蔵の顔を、直人は覗き込んだ。権蔵は押し黙ったままだ。

その時、直人は想像を絶する光景を目にする。

「……………」

「……！」

やけに反応の無かった権蔵。しかし、それには理由があった。権蔵はただ一点を見詰め、口を異様な形に歪めたまま動かないのである。歪めた口からよだれを垂らし、見開かれた目は、焦点があつていない。そして、彼の首には細く鋭い一線。

権蔵は、死んでいた。

第四話

数分後、直人の通報により警察が駆けつけた。

警察は初めに権蔵の検死を行った。薄暗かった部屋に白色灯がたかれ、亡骸となった権蔵を照らす。そして、ときおり閃くカメラのフラッシュが室内を一層明るくする。

「頸部にピアノ線……。窒息死か。遺書の見付からない状況から見て、恐らく他殺でしょうな」

手にした警察手帳に目を落ししながら、中年の警部、本郷昌憲ほんしゅうまさのりが言う。

権蔵の部屋には比留間、高橋、恩田、直人、正人の五名と三名の鑑識、そして本郷の計九名がいた。

部屋に光が入った事で、部屋の造りがわかった。室内には大型プラズマテレビとイタリア製の高級ソファ。その他にあるものと言えば、古今東西の宝剣や銘刀など。どれもかなり高価な物であった。

また、権蔵の外見も知ることが出来た。歳は七〇才代で、かなり丸々とした体型である。単純に目検討しただけでも一〇〇キロ以上はあるだろう。

恩田は今の状況に困惑し、目線が泳いでおり、直人は悲しみと怒りで顔をしかめていた。また、正人は権蔵の死を受け入れられないようで、ひどく怯えた様子で涙ぐんでいる。

「そんでよ本郷さん。おやじを殺したのは誰だよ！」

父親を殺された事への怒りからか、かなり憤った口調で問いつめる。本郷は僅かにたじろぐが、

「いえ、捜査はまだ始まったばかりでして、現段階ではなんとも…

…」

押され気味なせいか、語気が弱い。

「チクシヨウ！ 誰だよ、んな事しやがった野郎はよ！？」

本郷の回答が腑に落ちない様子の直人は、その場で地団駄を踏み

悪態をついて部屋を出る。その時、腕で目を覆っていた事を知る者は、その部屋には誰一人としていなかった。

直人がいきり立ち飛び出した事で、正人の中でも何か切れた。

「うわあああああ！！！」

突然大声で叫び出したと思いきや、何処かへ走り去ってしまった。

「見るからに、あなたはこの家の家政婦ですね？ お話があります。

一旦外へ」

奇行に走る正人を無視して、本郷は恩田に詰め寄る。彼女は小さく頷いて、本郷に付き従い部屋を出た。

「あ、そうだ。そこのお二方もよろしいでしょうか？ 捜査の邪魔になりますので」

振り向き様にそう言い放つ。高橋は唯々諾々と従ったが、比留間 はかすかに顔をしかめた。

その屋敷の応接間にて、本郷による事情聴取が行われた。

「この家の家政婦の恩田昌子さんですね」

恩田と向かい合わせに座った本郷は、屋敷の中にあつた家政婦事務所の書類に目を落としながら聴く。

「はい……」

未だに心の整理がつかないせいか、弱々しい返事だった。

「村瀬権蔵さんが亡くなられたのは、午後十時から十一時の間です。その時、恩田さんは何をされてました？」

「あの、十時三〇分まで、旦那様は生きておられたと思います」

「何故です？」

「十時三〇分頃に、旦那様に叱られましたので。きっとそれは、比留間さん達にも聞こえていると思います」

「そうですね……」

本郷は恩田の話した権蔵の最後まで生きていた時間を、手帳に書き込む。

「それで、その時は何を？」

そう言われた恩田は、自分の腕時計に目をやった。ちょっと型遅れで古ぼけたアナログの腕時計は、午後十一時五六分を指していた。つまり、権蔵の死はついさっきの出来事である。

「その時は、警備のお二人のために、旦那様の向かいの部屋の前で控えていました。それで、部屋から出てきた旦那様に『明日の来客に備えて、屋敷の掃除をしろ』と言われ、しばらくの間、お二階のお掃除をしていました」

「掃除はいつ頃から？」

「十時三〇分……、以降です。叱られた後に掃除をしろと言われたので」

「わかりました。その後は？」

「お二階の掃除が終わったのが、旦那様の遺体を見つけるちょっと前でした。多分、十一時を少し回ったくらいです」

「そうですか……。掃除の時に、何か妖しい物音や人影などは？」

メモを取りながら、恩田を見ずに問いつめる。

「いえ、見てません」

きっぱりと答えた。

「わかりました……。では、また後で聴くことがあるかも知れませんが、私どもの指示があるまでは、屋敷の中に入らないように。その際、権蔵さんの部屋には入らないように」

手帳のメモにざっと目を通してから言った。

「解りました」

恩田は椅子から立ち上がると、深々と一礼して部屋を出た。

「次の方、どうぞ」

「ふむふむ、権蔵さんは十時三〇分まで生きていた、と……」

応接間の隣室。薄暗い和室の壁に当てたコップから、二人の話を盗み聴く者が居た。比留間である。

彼は、取り調べの内容を事細かにメモ帳に書き込んでいた。

「まあ、権蔵さんの怒鳴り声を最後に聞いたのは、十時三〇分くら

いだな……」

大きめな独り言と共に、自分だけで妙に納得する。薄暗い部屋で盗聴に勤しみ、ペンを走らせ独り言。傍目から見れば、明らかにおかしな人である。

そのおり、応接間に次なる人物が現れた。

(で、話ってなんだよ)

大きめで荒々しい歩調と苛立った語勢。比留間は直人だと確信した。

(犯行時刻と思われる十時三〇分以降、直人さんは何を?)

(部屋で仕事をしてた)

(それから?)

(おやじの遺体を見つけるまで、ずっと仕事をしてたよ)

(証人は?)

(うるせえな!! いちいち答えられるかよ!!)

怒鳴り声と共に机を強く叩く音。その直後、応接間のドアが乱暴に閉まる音も聞こえた。

「なるほど、なるほど。遺体発見までずっとお仕事、と……」

即座にメモを取る。

その時、

「社長。なにしてんすか。刑事さんが呼んでますよ」

和室のドアが開き、ひよろりとした人影が覗く。

「のわっ! 高橋!」

いきなり高橋が現れたことに驚き、数歩あとずさった。一瞬の内に心拍数は跳ね上がり、呼吸は一気に荒く激しくなる。また、かなり動揺したせいか、メモ帳とペンを落としてしまった。

「驚かすなよ!」

「んな事より、何してんすか?」

「うっさい、忘れろ」

比留間はメモ帳とペンを拾い上げるとポケットにねじ込み、足早に高橋の横を抜け和室を出た。

和室を出た勢いで、隣の応接間に入る。応接間の本郷は、ソファに座ったまま聴取の内容の整理をしていた。低い机での書き物のせいか、少し無理な姿勢だった。

「ああ、失礼。まずは、お名前と職業から」

なんと無く高圧的な態度が気に食わない比留間は、よそよそしい態度で名刺を差し出す。

「ほう……。なんでも屋の比留間さんですか」

「……」

比留間は本郷の向かいに座り、足と腕を組んだ。どうやら、かなりいけ好かないタイプらしい。

「話を聴く前に。盗み聞きは関心しませんな。次にやったら、公務執行妨害で逮捕しますよ」

比留間と面を会わせず、淡々とした抑揚のない口調でそう言い放つ。

(げっ。バレてる……)

きつと高橋が現れた際に、突拍子のない声を出してしまったからだろう。冷や汗をたらたらと流し、ソファから飛び上がりそうになる。

「ま、まあ、その辺は、もうお互い大人なんだし、穏便に……」

語尾を濁しつつ営業用のスマイルをする。

「まあ、良いでしょう。ところで、比留間さんは、本日はどのような用件でここに」

「宝剣の警備なんですがね、いきなしこんな事件が起きて、なんだかおっかなびつくりですよ」

「ほう、おっかなびつくりの人が盗み聞きとはね……」

「あんたしつこい」

聴取が続かない。互いが互いを避けるように話しているからである。しかし、当の本人達はそれに気付かず、その後十分もの間、そんな議論が繰り広げられた。

「もう聞くことはありません。ありがとうございました」

「はいはいどうも」

もう帰れ、と言いたげな口調で言うと、気持ちの籠もってない返事で答えた。

比留間が部屋から出ようとしたとき、本郷がいやみっいたらしく告げる。

「それよりも盗み聞きは遠慮して下さい」

(チツ……)

退出際に追い打ちを掛けられ、彼は盗み聞き根性を更に燃え上がらせた。

(比留間隆をナメんじゃねーぞ)

当人は心の中でばやいただけのつもりだろうが、それは大きな独り言となっていた。本郷はそれを聞いてはいたが、さして気に留めもしなかった。

「比留間さん、散々怒られてましたね」

廊下で控えていた高橋が訊く。

「なんだ、あんたも盗み聞きか」

「何となくです、何となく」

「ああ、そうかい」

比留間は苦虫を噛みつぶした様な表情で、応接間に滑り込む高橋を見送った。

第五話

「さてえ。これからどうしようかねえ」

事情聴取を終えた比留間は今、権蔵の部屋の前にいた。高級そうな木製の扉には『keep out』と書かれた黄色いテープが張り巡らされ、入る物の侵入を拒んでいるようだった。

舌なめずりしてるかのような口調だった。しかも、どこから取り出したのか、白い手袋を着用している。

「ではでは、参ります」

比留間が扉の取っ手に手を掛けた、正にその時、

「何してんすか？」

背後から、気の抜けた声が聞こえた。高橋である。比留間は特に驚きもせず、背中を見せたままの姿勢で取っ手を握った。

「警察に変わって、現場検証」

「えー!？」

どこかうわずっていて嬉しそうな声と、素っ頓狂であっけらかんとした感じの声。

高橋が呆けた表情で固まっているのもつかの間、比留間は扉を開けた。観音開きの扉は、それ相応のきしみと共に開け放たれる。中から漂う品の良い木材の香り。それが調度類から発せられる物であると判断するのに、さほど時間は掛からなかった。

その時、また新たな声が響いた。今度は高橋と違い、きびきびとした感じの声だった。

「おいおい。勝手に入るな！」

二人が勢いに溢れた声に驚き振り向くと、そこには鑑識の一人が立っていた。身の丈は高橋並み。しかし、がっしりとした筋肉質の男で、一目で熱血タイプであることが伺えた。

「ほら、どいてどいて。現場は鑑識の聖地なんだよ。部外者立ち入り禁止」

ずけずけと二人の間に割って入り、比留間を押しつけて取っ手の主導権を奪うと、有無を言わずに扉を閉めた。

「はいはい、さっさとここから離れてね。ここには入れないよ」

二人を押し返し、扉の前でふんぞり返って仁王立ちする。

「ほづら、やっぱり怒られる」

高橋が呆れかえった口振りで比留間に向けて言う。その言葉を掛けられた比留間といえば、難しい顔つきで宙の一点を睨んでいた。

眉間には、尋常に無いくらいの皺が寄っていて、実年齢よりも十歳は老けた印象がある。

「どうしたんすか？」

「何か。何か引つかかる……」

手を顎にあて瞑目し、必死に何かを思い出そうとしているように見えた。

難しい表情で立ち尽くす比留間と、それに寄り添って突っ立つ高橋。そして、熱血鑑識官がそんな二人に訝しげな視線を送っている。廊下に変な空気が漂ってからややあって、比留間は熱血鑑識官に詰め寄った。しかし、眉間の皺はそのまま、はつきり言って不気味だった。

「な、何か……？」

異質なオーラを前にたじろぐ鑑識官。そんな彼をよそに、比留間はその顔をじいっと見詰めた。

「むむむ……」

「一体、何ですか……。ここには入れませんよ」

「！」

記憶の堂々巡りに終直点が見えたのか、すっかり細くなっていた比留間の目が、くわっと見開かれた。それと同時に、鑑識官が更にとじろぐ。

「お前あれだろ！ 『推研』の赤川！」

どうやら、熱血鑑識官は比留間の旧知の間人らしい。赤川と称された男を指差し、何年かぶりにであった友人に会うような、すつき

りと晴れ渡った表情で声を張り上げる。あまつさえ、指をパチンと鳴らす始末だ。

こうなると鑑識官の方もたじろぐ訳にはいかず、何とか思い出そうと記憶をひねり出す。小さな声で『推研』だの『え、誰?』だのと呟いている。その間にも、比留間は赤川の顔を覗き込んでいた。

「あの、もしかして、比留間先輩ですか?」

ひねり出した記憶の断片を口にする。しかし、それだけで比留間は良かったようだ。

「そうだよ! 比留間だよ。いやあ、久しぶりだなあ!」

力強くガッツポーズを作り、彼の拳が何度も宙を横切った。

「あ……、あの……」

「ん?」

その場で浮きに浮いている自分の立場が居た堪らなくなったのだろう。高橋は申し訳なさそうに声を絞った。

「二人は、一体どういう?」

彼は、自分の中で渦巻く疑問を修正したり脚色したりせず、ありのままストレートにぶつけた。相手は無論、比留間である。

「ああ。俺と赤川は、大学の推研……。推理研究同好会の先輩後輩なんだ」

「なるほど」

高橋は、もやが消えたような、晴れ晴れとした表情でうなずく。

そんな彼を尻目に、比留間は大学時代の思い出話にふけていた。「んにしてもよ。これまで元気だったかい?」

営業用の笑顔も、大人の世界の礼儀作法も見られない。比留間は完全に童心に帰っているようである。

「はい。でも、比留間先輩が中退した時はビックリしましたよ」

「いやいや、それはお前だけじゃないさ。俺もさ、お前が鑑識になつて、それも久々の再会が仕事中心で事に驚いてる」

「そういえば、先輩の今の職業って何ですか?」

「おお、これよこれ」

比留間はどこからともなく名刺を取りだし、慣れた手付きで赤川に差し出した。

「なんでも屋……」

赤川は名刺に書かれた比留間の職業を、目で追い声に出した。次の瞬間、名刺と向き合っていた彼が顔を上げると、その顔には懐疑の念が宿っていた。

すると、比留間は待ってました、と言わんばかりに、自分の今の境遇について語り出す。

「大学を中抜けして直ぐにさ、それを始めたんだ。安いけど汚いテナントビルでね」

「へえー。でも、先輩らしくて良いですね」

「そうか？ あっ、そうそう」

比留間は振り向きざまに、依然あっけらかんとしたままの高橋を指指す。

「こいつは俺の部下の高橋」

赤川は比留間ね指の先を見る。そこには、当然の事ながら高橋が突っ立っていた。

「ど、ども」

高橋は反射的に会釈する。すると、赤川もそれに倣った。

「さてさて、それでは本題に戻ろうか」

二人の間を割るようにして、何かを思いだした比留間は、大仰な口調で言う。赤川と高橋は、ほぼ同時に比留間の方を向いた。

「ここに入れてくれ。ついでに現場検証もさせてくれ」

部屋の扉を指差し、どこことなく気軽である。『煙草を吸ってもいいかい？』と頼む姿に似ていた。

すると、赤川は職務に対する熱意が戻ったのか、この場に登場した時と同じ顔つきになる。ただ、相手が大学時代の先輩であると言うことで、彼の言葉にはそれなりの敬意が込められた。

「先輩。そこには入らないでください」

「ダメかい？」

「はい。それだけは絶対にダメです。諦めてください」
「そうか……」

度重なる注意と赤川の熱気に負けたのか、比留間は大人しく退散した。

「おい、高橋。行くぞ」

別に行くあては無かったが、高橋にそう告げて歩き出した。高橋といえば、そんな比留間に唯々諾々と従う。

「残念だったなあ……」

比留間は数歩歩いた所で立ち止まり、天井を見上げる。その表情には、思い通りにならなかった事への悲しみや絶望の類の他に、妙な自信が宿っているようでもあった。それを裏付けるように、口の端がわずかに吊り上がっている。

「？」

赤川は比留間の行動の意味が分からず、扉の前できょんとんとする。

「……」

しばしの沈黙。その間、比留間はずっと天井を見上げていた。悲しみとも絶望とも期待ともとれない、曖昧な表情のままずっとである。

そして。

「九月……、七日……」

重々しく。まるで、その言葉を発するのを、面倒臭がるかのよう
に言った。消え入りそうな、弱々しい声だった。

「あの時、まさか君が」

「はい！ はい！ わかりました！ 先輩、ささ、どうぞ」

赤川は比留間の言葉を遮る様に声を荒げたと思った矢先、彼自ら扉を開けた。声はうわずり、顔中汗だけで、とても必死そうな顔つきであった。扉を開けると脇に流れ、ガードマンの如く直立する。どうやら、『九月七日』は、赤川にとってかなり壮絶な日だったのであろう。

比留間は扉が開かれた事を確認すると、不気味な笑みを浮かべる。

扉の方に向き直るや否や歩き出した。赤川の隣を通過する際、

「忘れたりはないよ。まさか」

「どうぞ。好きなだけ現場検証をなさって下さいませ」

「またも、比留間の言葉を遮るように怒鳴る。自分でも思い出したくない過去があるようだ。全身を硬直させて棒立ちする姿は、それと格闘しているようにも見えた。」

「何があつたんですか？ 九月七日に」

高橋が比留間に訊く。すると、比留間は素っ気なく返す。

「さあな。でも、あんまりこれを使うなよ。可哀想だ」

優しさか、それともおちよくりかどうか解らない言葉で返した。

その時もずっと、赤川は硬直していた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3390a/>

なんでも屋比留間

2008年11月7日07時45分発行